

わが家のアイドル



河内にお住まいの
小嶋 正幸さん・佐和さんの

長男 **祥斗**くん(15歳6か月)

次男 **拓斗**くん(10歳10か月)

長女 **妃莉**ちゃん(5歳9か月)

お兄ちゃんが二人いるので
 ちょっぴり男勝りの女の子です。
 逆上がりもたくさん練習して
 大きな鉄棒でもできるようになりました！
 モコちゃんのお散歩も大好きです！

みなさんのお宅のアイドルの写真を募集しております。市役所総務課へどしどしお寄せください。



五十集と書いて「いさば」と読みます。魚市場や魚商人、水産加工者の伝統的な呼び名で、漁業が盛んだった明治から戦前の下田では五十集衆が大きな存在感を持ち、独特の町並みが形成されていました。

下田の漁業

江戸時代より海上運輸で栄えた下田は、黒潮が近海を流れ、漁場にも恵まれています。特に神子元島青根付近の海域はカツオが豊富で、鰹魚は明治時代の下田漁業の花形でした。当時は樽船で、漁場が近いことから朝に出港し夕方に帰る近海漁業でした。

冷凍技術が未発達だった時代、水揚げされたカツオの多くは、鰹節に加工されました。河岸通りには鰹節製造のカマヤが軒を並べ、稲生川沿いの河岸には「ガンゲ」という川に降りる階段や斜路があり、

漁民や商人で活気に溢れていました。明治中頃から黒潮が変化し、漁場が遠くなったことや、漁船の近代化に後れたことから地元漁船による鰹漁は衰退していきませんが、大正時代以降、下田は漁場に近しい利点から遠洋漁船の基地としての役割を強めていきます。

土佐鰹船団

昭和初期に下田に進出した土佐鰹船団、通称「トサカツ」は下田の経済に大きな影響を及ぼしました。トサカツの漁法は一本釣り、生餌であるイワシが不可欠でした。下田は鰹漁場に近いだけでなく、生餌の供給地として優れていたことも船団拠点とした大きな理由でした。やがて、多くの船主が下田に居住し、原町から中原町にかけての一带は土佐町と呼ばれるようになりました。



戦前の河岸通り(絵葉書)

遠洋漁船の船員にとって陸にあがることは一時の休息でした。銭湯で疲れを癒し、弥治川沿いの店に練り出すのが大きな楽しみだったようです。

今日、大漁旗を掲げた鰹船の帰港や、五十集が鰹節を作る姿、鰹船の船乗りが町を闊歩する情景は見られなくなり、河岸のガンゲも姿を消しましたが、当時の隆盛を伝える家々が今なお市中に残されています。



明治時代にカツオ船の網元だった家(須崎町)

問合せ先
 生涯学習課社会教育係

☎ 5055



「広報しもだ」は再生紙を使用しています



伊豆縦貫自動車道を早期完成しよう!!

「伊豆縦貫自動車道ロゴマーク」を利用して、伊豆縦貫自動車道の整備促進と活性化を県内外にPRしましょう!! ご利用方法については、以下の市ホームページをご覧ください。

■ 下田市ホームページ <http://www.city.shimoda.shizuoka.jp/>